現代日本における多文化共生社会への向き合い方

―日本代表への期待感から―

沢野　史歩
HS30-0121E

目次

1. はじめに
2. なぜ共生が必要なのか
3. 本論文におけるスポーツ
4. スポーツの持つ寛容性・柔軟性・社会的役割
5. プレースタイルの言及からみえる認識的ナショナリズム
6.　考察

1　はじめに

本論文は、スポーツによる異文化理解や不寛容除去はいかにして可能かという問いを立て、日本以外の国に出自を持つ日本代表選手が日本社会に適応する過程を明らかにする。近年陸上競技、テニス、ラグビーなどのスポーツおいて、「海外に出自のルーツを持つ日本代表」への支持や期待感をメディア報道から読み取ることができる。日本以外の国に出自を持つ日本代表選手、越境するスポーツ選手が日本社会に適応する過程とマジョリティである日本人が自分たちと彼らとの違いに対してどのように受け入れているのかを分析することで、日本社会が異なる文化や他者と共生する過程を明らかにしたい。

2. なぜ共生が必要なのか

外国人労働者や日本社会について議論する際、「多様性」や「共生」といった言葉で表わされる。現代日本において、なぜ異なる文化への理解が求められているのだろうか。

異なる文化や他者が明確に「私たち」とは違うというよりも、「外国にルーツを持つ」人びとのように「何となく私たちとは違う」人びとを含めた共生を考えることが必要になっている。それは違う人びとが持つ価値観や役割を理解すると共に、自らの共同体においての立ち位置を確認することが必要になっているからだろう。その代表的な対象として本論文では､「外国にルーツを持つ日本代表選手」を手がかりに共生について考えていく。

3. 本論文におけるスポーツ

本論文では、日本代表が編成される国際規模の試合が行われ、新聞でも報道される勝敗や広告などにより報酬が生じるスポーツを対象にしていく。新聞記事を用いる理由は、メディアは社会の支配的イデオロギー（Coakley and Donnelly 1982:200）が反映されるからである。社会の支配的イデオロギーとは、社会的地位や権力を持っている人びとや大多数の国民の考えであり、それらが文章として反映されている新聞記事を分析することで、そのスポーツに対する国民の反応や考えを読み取ることができると考える。

4. スポーツの持つ寛容性・柔軟性・社会的役割

歴史的にみればスポーツはナショナリズム、性差別、人種差別、同性愛差別などの問題にも深く関わっているが、移民間の肯定的な関係形

成をもたらすという意味でスポーツが社会のセーフティネット化する現状やスポーツのグローバルな拡大のなかでエスニシティやナショナリティが越境やプレー継続のための手段として理解される状況も出てきている（ 植田・松村2013:447; 石原 2012:117-118)。

またコークリーはスポーツの社会的な役割について「スポーツが多くのちがった政治理念や体制と調和できるほど柔軟性のあるもの」と指摘し、社会の維持に果たす 4 つの働きを挙げている（コークリー 1982:40)。

5. プレースタイルの言及からみえる認識的ナショナリズム

「認識的ナショナリズム」とは、「見ず知らずの人びとを文化や言語等の共通の属性を有する「同胞」として想像し、そうした同胞の集合を明確な境界線を有する単一の共同体と見なす認識の枠組み」である（笹生　2020:93－95)。つまり私たち日本人は日本代表選手を同胞・国家の象徴としてみなしている。そのとき「外国にルーツを持つ日本代表選手」はどのように認識されることになるのだろうか。

本論文では、ケンブリッジ飛鳥選手、白鵬選手、リーチ・マイケル選手、大坂なおみ選手の 4 人を取り上げ、各選手の日本社会への適応の過程、または反発、それらに対する日本国民の反応を分析していく。

選手のプレースタイルへの言及と、日本社会がふさわしいとしている規範や態度に対する選手をめぐるメディアの反応をとおして「外国にルーツを持つ日本代表選手」に対する認識から、日本人として結果を出すことへの期待、日本国民の持つ寛容性、多様性を他国にアピールするという期待、国籍は関係なく一人の選手として好記録を出すことに対する期待といった 3 つの期待感を抱くことで、彼らの持つ身体的・精神的な差異を補いうることが分かる。

6. 考察

「外国にルーツを持つ日本代表選手」に対して日本固有の文化・伝統が重視されている領域においては、血統主義や血筋から生じるナショナリズムに打ち消される場合もあるが、違いとして最も分かりやすい外見・言語の違いは「日本人らしさ」の要素として必須ではなく、集団行動に適した思考を持っているかという精神面が重視されていた。しかしそうした身体的・精神的な差異もまた彼ら自身の活躍への期待感を抱くことを通して軽減されていく。

多文化共生の社会を考えていくとき､「私たちとは何となく違う」人びとに対する向き合い方の一つとして考えられるのではないだろうか。

文献

石原豊一, 2012, 「グローバルスポーツシーンにおける 『コリアン』・アイデンティティの変容」―ある『在日』野球選手の事例から」『コリア研究』, 立命館大学コリア研究センター, 第 5 号, 117-118.

植田俊・松村和則, 2013, 「セーフティネット化する移民のスポーツ空間― 群馬県大泉町のブラジル・フットサル・センター（BFC） の事例―」『体育学研究』, 一般法人 日本体育・スポーツ・健康学会, 58 巻第 2 号, 447.

笹生心太, 2020, 「スポーツと「認識的ナショナリズム」―先行研究のレビューから―」『東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要』, 東京女子体育大学 東京女子体育短期大学, 55 巻, 93-95.

Jay J. コークリー, 1982, 『現代のスポーツ その神話と現実』道和書院.